京都大学 大学院教育学研究科／教育学部

No.25　2012.12

（目次）

● 巻頭言
激動と不動のこころ ･････････････････････ 副研究科長　皆藤　章 ･････････････ 2

● 研究ノート
教員から ･･････････････････････ 教育方法学講座　准教授　石井 英真 ･････････････ 3
院生から ･･････････････ 心理臨床学講座　博士後期課程２年　井芹 聖文 ･････････････ 3

● 社会人院生から ･･･ 教育科学専攻（専修コース）　修士課程１年　稲川 三千代 ･････････････ 4

● 留学生から ････････････ 生涯教育学講座　修士課程１年　トパチョール・ハサン ･････････････ 4

● 臨床教育実践研究センターから
････････････････ 附属臨床教育実践研究センター　特定助教　古川 裕之 ･････････････ 5

● 教育実践コラボレーション・センターから
･･ 心理臨床学講座　教授　教育実践コラボレーション・センター長　桑原 知子 ･････････････ 5

● 多次元入試研究会から ････････････････ 研究科長　前平 泰志 ･････････････ 6

● 事務室から ････････････････････････ 総務掛長　谷川 嘉奈子 ･････････････ 6

● 図書室から ････････････････････････ 図書掛長　奥野 雅子 ･････････････ 7

● 諸記録 ･･･ 8～10
①おもな出来事　②入試結果　③学位授与件数　④人事異動　⑤外部資金受入
⑥科学研究費補助金　⑦オープンキャンパス2012

巻頭言

激動と不動のこころ

副研究科長　皆藤　章

前平研究科長の指名を受けまして副研究科長に就任してから、早くも半年が経過しました。教育研究評議員にも選出された今年度は勉強することの多い時間でもありました。この間、研究科長をサポートしつつ教育学研究科全体のことを考えて参りましたが、京都大学という組織が激動する様相に驚くことしきりでした。その激動は、教育と研究の間で大きく揺れ動く振り子さながらでした。「教育」からは、日本の将来を担う人材を京都大学はいかに育成していくのかという観点、一方「研究」からは、世界最先端の成果を挙げるための研究体制をいかに構築していくのかという観点、これらが振り子を揺らし続けており、現在もとどまるところを知りません。そうした激動の風を教育学研究科も浴び続けています。このようななかで、本年度前半は、激動の風を風力発電として創造的に活かしていく方途を前平研究科長、鈴木副研究科長、高見理事補、吉井事務長はじめ多くの皆さま方と具体的に考え続けてきた半年でした。そのひとつの成果が現れたこととしては、研究科長のリーダーシップの下、教育学研究科だからこそできることを模索するなかで、本年度、総長裁量経費を得て大学入試の在り方についての議論を開始したことが挙げられます。「多次元入試研究会」はその具体化のひとつです。研究科内外から大学入試と教育に関わる専門家の先生に話題提供をいただき、毎回貴重な学びのときを得ています。本年度中に具体的方向性を見出すべく、教育学研究科全体として今後努力していきたいと考えています。また、いまひとつの成果の現れとして、京都大学が行っている4つの博士課程教育リーディングプログラムの3つに教育学研究科が参画していることが挙げられます。それは、オールラウンド型「京都大学大学院思修館」、複合領域型（安全安心）「グローバル生存学大学院連携プログラム」、そして本年度採択されました複合領域型（情報）「デザイン学大学院連携プログラム」の3つです。こうした成果は、京都大学に対して教育学研究科の存在意義を具体的に認識してもらう良い機会であるとともに、部局横断型の教育・研究を通して教育学研究科に新たな創造的な知がもたらされることにつながると言うことができるでしょう。

さて、このような激動の波にしっかりと乗っていこうとする流れは、教育学研究科が伝統として堅持してきた在りようをクリアに再認識させてくれるものでもあったと思っています。教育学研究科の使命のひとつは、学校教育における質の高い教員を養成することにあります。このことは、教育学研究科が京都大学全体の教職委員会の責任部局になっていることからも、京都大学にとって周知のことであると言えるでしょう。そしていまひとつは、学校教育だけを教育と位置づけるのではなく、教育を広い意味で捉えるということにあります。すなわち、学校外における多種多様なフィールドもまた教育を担う場として位置づけ、そうしたフィールドに参入する高度専門人の育成を行うことを使命としています。後者につきましては、先に述べましたリーディングプログラムへの参画によって、京都大学全体への認知も少しずつ高まっていくのではないかと期待しています。また、学外との連携としては教育実践コラボレーション・センターを中心にさまざまな試みが展開されています。本年度の活動として注目されるのは桑原知子センター長を中心として家庭裁判所調査官との研究会が始まったことです。少子高齢化が叫ばれてすでに長いときを経ていますが、このライフサイクル・ライフスタイルの変容に人間の営みは充分に対応できていません。こうした観点からみるとき、学校という場はもちろんのこと、医療、司法・矯正、福祉などさまざまなフィールドにおいて課題が山積していることは周知の通りです。このような課題に対して教育が果たすべき使命は、豊かな人格と質の高い知識・実践を備えた高度専門人の育成にあると言えるでしょう。

最後になりましたが、わが教育学研究科は、将来をしっかりと見据えた羅針盤を手にして船に乗り込み、高等教育改革という激動のなかを、教育学研究科本来の使命を不動のこころでもって進むべく努力していかねばなりません。また、それが可能な教員・事務組織であり、教育学研究科一丸となって取り組んで行けることを確信しています。

研　究　ノ　ー　ト

教　員　か　ら

教育方法学講座　准教授　　石　井　英　真

京都大学に着任して半年あまりが経ちました。「もう12月か」と思う一方で、「まだ12月か」という感覚も持っています。なんだか矛盾していますが、それだけ密度の濃い時間を過ごさせて頂いているのだと思います。

私の専門は、教育方法学です。学習者の「学び」に目的意識的に介入する教師の「教える」という行為に面白さを感じ、その危うさと可能性について考えてきました。特に、教師の「教える」という行為を制度として目的合理的に編成した場である、学校での教えと学びの在り方について、日米のカリキュラム研究・授業研究の蓄積を手がかりに探究してきました。そして、社会の構造変容の中で学校がめざすべき学力像（学校でできること、学校でこそすべきこと）を検討しつつ、それに基づいたカリキュラム、授業、評価のシステムをトータルに構想する作業を行ってきました。

教職課程の仕事を担当させていただいていることもあって、最近は、「教える」という行為そのものを改めて見つめ直すとともに、その担い手である「教師」の専門的力量や成長過程について考えています。教育現場に行くと、ものすごい勢いで教師の世代交代が進んでいることを肌で感じます。日本の教師たちが自生的に生みだし共有してきた技や文化が若い世代に継承されていないことに対する危機感とともに、若い教師たちの熱意と柔軟性、そして、彼らが生み出しつつある新しい教育文化に可能性も感じています。

教員養成については、現在その高度化が課題とされ、実践的指導力を重視する形での「修士レベル化」が提起されています。しかし、それが真に専門職としての教師の成長につながるものとなるには、上記のような文化の継承と再創造の問題を視野に入れることが必要だと考えています。システムの構築を志向するこれまでの自分の研究を、行為者・当事者である教師の実践的思考や自生的な教育文化との関係で捉えなおすとともに、人が育つ契機を内在化させたシステムのあり方を考えられたらと思っています。

院　生　か　ら

心理臨床学講座　博士後期課程2年　　井　芹　聖　文

心とことばに興味を持って2005年に教育学部に入学して以来、今年で本学での生活は八年目を迎えました。相手とのコミュニケーションのツール、思考活動、ときに思い込みやすれ違いを生み、記号的意味合いを帯びるなど、ことばは多岐に渡って私たちの心に働きかけ、私を魅了してきました。院生になり実際に専門家として心の苦しみを抱えておられる方とお会いするようになってから、この思いはさらに深まりつつあります。心理臨床の分野では研究と実践は相互不可分で、実践（につながるもの）からしか意義ある研究は生まれてこないと思い、当欄を「実践ノート」として、私自身の思いの変化を少しですが書いてみます。

どちらかと言えばこれまで思考優位であった私にとって、プレイセラピーでの非言語的な交流にどこか入り込めていない自分や、言語面接でも知的処理でごまかしていないかと感じるときがありました。ことばにしようとしても難しいこの感覚が私を悩ませていたあるとき、排除するのではなくよく味わってみようと試みました。慣れない活動でしたが、少しずつ、むしろこちらのほうが直接的に今眼の前にいる方が訴えているものを感じ取っているなと実感しました。このことは、思えばしばしば本に書いてある内容なのですが、相手の心を多面的に理解し、その方もまた自分を知っていく作業を行うために、臨床家はことば以前のものに開かれ、敏感であることの重要性を、私自身あらためて体験的に知ったように思います。相手がどのようにことばを用いているのか、そして二人の関係性の中から生まれてくる、身体感覚が織り込まれたことばの機能について、その創造性と境界性の意義の探求が私の現在の関心事です。

心理臨床家としてはまだまだ経験は浅く、だからこそ自分の感覚を磨きつつ、出会う方たちから学び、その方たちの心に還っていくものを大切にすることを信念に、また日々の臨床活動に励みたいと考えています。

社会人院生から

教育科学専攻（専修コース）　修士課程1年　稲川三千代

私は、吉田山のふもとに住まい、京都大学経済研究所で教務補佐として勤務して8年になります。5年前、私は毎朝、娘の手を引いて、吉田キャンパス構内を通って保育園まで歩いて通い、娘を園に預けてから職場に向かう日々を過ごしていました。暑い日も寒い日も、時に先を歩く娘を追いかけながら、時に水たまりに足跡を残そうとする娘を急がせながら、私は親であることの不思議について考えていました。娘との間に芽生えた絆や子を思う気持ちはどこから来て、娘とどのように繋がっているのか。娘は私をいつ親と認識し、私を慕う気持ちはどのように生まれ育まれているのか。かすかな寝息や理由のわからないぐずり泣きにでさえ、愛しさを感じるのはなぜか。一方、虐待はなぜ起こるのか。「親になる、子が育つ」ということはどういうことか。育児書にもネットにも書かれていないこれらの問いの答えを日々探っていました。

そんな中、経済研究所主催の子育てに関するシンポジウムがあり、パネリストとしてご登壇をお願いするため、明和政子先生の研究室を訪れたのが、この疑問に挑むきっかけとなりました。明和先生は、ミクロな視点でマクロで動的な人間行動を科学的に研究されており、私と同年代の女性として、母親として、私の素朴な疑問を真摯に聞いて下さいました。そして、今あるところに私を導いて下さいました。今にしてみれば、必然たる偶然だったと思います。

学生生活が始まるや否や、指導教員の追究するレベルとクオリティーの高さに科学の真髄を見いだし、発達の謎にせまる意気込みを体感しました。私の研究活動ですが、先行文献を読むたびに自分の立てた研究計画が崩れ、別の文献にふらふらと心踊らされ、また新たな研究計画を立てては崩すことの繰り返しが続いています。まさに「産みの苦しみ」を味わっていると言えます。

吉田盆地を吹く風は、時に優しく時に厳しい。もう少し、その風に身を任せてみようと思っています。

留学生から

生涯教育学講座　修士課程1年　トパチョール・ハサン

トルコのエーゲ海沿岸地方にある、国立チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学教育学部日本語教育学科を卒業した私が、京都大学のメディア文化論研究室で勉強をはじめてから、早くも二年が過ぎようとしています。

私は長年、歴史とメディアそのもの、または社会に対するメディアの影響に関心を持ってきました。特にインターネットの時代がはじまってから、現代社会はメディア研究なしには読み解けないと痛感してきました。そのような関心から、京都でメディア研究を始めた私が来日一年目の研究生時代に得たのは、歴史から現代を捉えるという視点です。そこで今は、1968年・明治百年祭を例に「国民アイデンティティとメディア・イベント」について修士論文を書く準備をしています。

今では忘れられている1968年の「明治百年祭」ですが、戦後日本のメディア・イベントとしては看過できないと思っています。時代的に、復興がテーマの「東京オリンピック」（1964年）と未来を描いた「日本万国博覧会」（1970年）の間にあり、過去を意味づけようとした「明治百年祭」は、1968年10月23日に政府主催の記念式典が行われただけでなく、テレビや新聞、学校を総動員した全国的なイベントでした。こうした政府主導の「百年祭」に対しては、「歴史の見方をゆがめる」、「過去を美化するものだ」として、歴史学者、教育者などを中心に猛烈な反対運動が引き起こされましたが、その後の日本社会は、司馬遼太郎小説が人気であり続けるように、「明治」に対して良いイメージを共有しているように思います。しかし、「明治百年祭」についての先行研究はほとんどなく、あるとしても、イデオロギー的な批判に留まっています。従って私は、1968年・明治百年祭が日本国民の歴史意識に及ぼした影響について、政府のねらいとメディアの機能という二つの側面から検討しています。これらはメディア研究における受け手、送り手、媒体に対応していると言えます。

1923年に建国されたトルコ共和国は、2023年に百周年を迎えます。つまり、トルコ人として日本の「明治百年祭」を研究することは、将来母国の「百年祭」研究の基礎となるでしょう。「明治百年祭」イベントの総括、政府の見方、研究者とジャーナリズムの見方などを研究し、将来「トルコ百年祭」と結び付けたいと思います。そして、本研究をもって理解したことを「トルコ百年祭」研究のために利用し、両国の百年祭を対照的に研究したいと思います。

臨床教育実践研究センターから

附属臨床教育実践研究センター　特定助教　古川裕之

臨床教育実践研究センターは、平成9年に設立され、今年で16年目を迎えました。センターの中心となる心理教育相談室では、長年広く一般市民に開かれた形で、臨床心理実践を積み重ねて参りました。この臨床活動を基盤としながら、さらに社会へ、実践知の還元を目的として、当センターでは活動を行っております。その一環として、外国人客員教授を講師にお招きして開催する公開講座と、主に学校教育現場で子どもに関わる専門家を対象とした、「心の教育」を考える機会としてリカレント教育講座を毎年開催しています。リカレント教育講座は、例年2月頃に2日間に渡って開催してまいりましたが、より多くの皆さまにご参加いただけるよう、今年度は学校現場が夏季休暇中となります8月に開催いたしました。その結果、100名を超える方からお申し込みをいただくこととなりました。今年度は「子どもの攻撃性・衝動性・暴力」をテーマとして、シンポジウムと分科会（事例検討会）を行い、学校現場だけではなく、児童相談所や児童養護施設など、様々な領域で子どもに向き合っておられる方々が一同に会して、よりよい実践を目指した活発な議論が行われました。今後も教育現場で問題となっている事象について取り上げた講座を開催していく予定です。

また、昨年発生しました東日本大震災以降、当センターでは「こころの支援室」を開設し、様々な活動を行ってきました。今年度は、「緊急スクールカウンセラー等派遣事業」の枠組で、京都大学医学部附属病院精神科神経科・京都府内の精神保健医療機関の医師・看護師等の方たちと合同で「京都子どもの心のケアチーム」を結成し、福島県での長期化する避難生活でストレスを抱える児童・発達障害児・保護者・教職員等に対する支援を行っています。

このように、人の心に向き合う地道な実践を続けている臨床教育実践研究センター、および心理教育相談室の活動にご支援賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

教育実践コラボレーション・センターから

心理臨床学講座　教授　教育実践コラボレーション・センター長　桑原知子

平成19年度から始まった「子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究推進事業」が完了した後を受けて、今年度からは、その活動を日常的な実践としておこなっていくことになりました。4月から半年が過ぎ、活動は順調に引き継がれるとともに、さらに新しい展開がみられております。

新しい展開の中心をなしているのは、他の機関や学校との強力な連携（コラボレーション）です。たとえば、京都家庭裁判所との間では、離婚後の親子関係をめぐる問題解決や、非行少年に対する、親を巻き込んだ更生プログラムの構築など、現代の家族関係に踏み込んだ取組みがなされています。また、和歌山高校とは、密接な連携を図りながら、生徒がいかに有能性と生命性を高めることができるか、さまざまな立場からともに知恵をしぼり、実践をおこなっています（和歌山高校・京大連携プロジェクト）。こうした取り組みに関わる院生たちは、さまざまな講座に属しており、講座を超えて連携（コラボ）するという、従来にはない教育実践がおこなわれており、教育的意義も高いものと思われます。

その他、コラボレーション・センターでは、Eフォーラムの取り組みも以前にもまして積極的に実施され、教員のニーズに応えておりますし、これまで続けられてきております日・中・韓を結ぶ国際的連携（コラボ）も、絆を強めております。特に、今年度は、入試改革をめぐって、焦点化された議論が展開されており、11月1日には、国際シンポジウム「東アジア地域における大学入試改革」が開催されました。教育学研究科として、意義ある貢献をなしているものと認識しております。

さまざまな活動を支えていただいている教員・研究員をはじめ、事務の方々および院生さんたちに心より感謝するとともに、今後のさらなるご協力とご支援をお願いしたいと思っております。

多次元入試研究会から

教育学研究科長　前平泰志

本年度「総長裁量経費」をいただいて、高大接続を基調とした大学入試改革の検討を本学部でも開始しました。その一環として原則毎月1回、大学入試に詳しい内外の専門家や実際に入試改革に取り組んでいる学内の教員の方々を講師に招いて研究会を開いています。以下のように、これまで特別回を加えて合計6回開催しました。研究会は原則、教職員、学生どなたでも参加できます。また多くは、OCWによって配信されていますので、どなたでも視聴できます。また、これと並行して8月のオープンキャンパス、11月の東アジアの国際シンポジウム、12月のE.FORUMでも大学入試をテーマに、シンポジウムを開催しています。大学入試改革が本学の最重要課題のひとつであり、社会的にも関心の大きな事柄であることを考えますと、できるだけ幅広い層から、多くの人のご意見をいただきつつ、より望ましい入試改革の方向を提言できればと願っています。

――――――――――――――――――――――――――――――

第1回：平成24年7月12日（木）
南部広孝准教授（教育学研究科）
「東アジア地域の入試改革の動向から京大入試のあり方について考える」

――――――――――――――――――――――――――――――

第2回：平成24年8月20日（月）
楠見孝教授（教育学研究科）
「批判的思考力の評価」

――――――――――――――――――

第3回：平成24年9月27日（木）
大塚雄作教授（高等教育研究開発推進センター長）
「教育評価と大学入試」

――――――――――――――――――――――――――――――

第4回：平成24年10月4日（木）
惣脇宏教授（学際融合教育研究推進センター）
「入試改革と大学入試センター」

――――――――――――――――――――――――――――――

特別回：平成24年11月21日（水）
Prof.Dr. Lothar Wigger　ローター・ヴィガー教授
（ドルトムント工科大学の教育科学・社会学部）
「ドイツにおけるアビトゥアと学究能力をめぐる議論」

――――――――――――――――――――――――――――――

第5回：平成24年11月29日（木）
萩原正敏教授（医学研究科　生体構造医学講座）
「入試改革と京大予科構想
　：京大医学部は不治の病の治療に挑戦する医師を育てたい」

――――――――――――――――――――――――――――――

事務室から

総務掛長　谷川嘉奈子

共通事務組織の設置が検討されていることについては、構成員の皆さまへもすでにお知らせしているところですが、現時点での検討状況についてご報告させていただきます。

まず、今回の事務改革の背景として、定員削減等により小規模な事務部が増え、事務職員一人当たりの業務量・種類が増大したこと、またその結果、人材育成機能の低下や事務処理の質・効率性が低下したこと等の問題がありました。本研究科事務部においても、常勤職員数は事務長以下計9名で組織されており、同様の問題に直面しています。

そこで、事務の効率化・集約化を推進し、併せて事務組織を集約し、共通事務化することで、スケール・メリットを活かした効果的な事務体制となるよう、検討が進められています。

◆本部構内文系研究科・研究所共通事務部（仮称）の検討単位
文学研究科（文化財総合研究センター）、教育学研究科、
法学研究科（公共政策連携研究部）、経済学研究科（経営管理研究部）、
人文科学研究所、経済研究所、

総合博物館、カウンセリングセンター、大学文書館

◆事務体制の検討状況（2012年12月現在）

現在の事務部が、「共通事務部（総務課・経理課）」と「部局事務」に分かれます。

・事務長→　部局事務に配置されます（共通事務部の部課長を兼ねる場合があります）。

・総務掛→　教授会や部局の委員会に係る事務、郵便物等の文書収受、部局長の秘書的業務は部局事務で行います。
出張関係、謝金伺関係、任免・給与・共済その他の人事関係、研究助成・国際交流関係等の事務は共通事務部総務課で行います。

・会計掛→　原則として全ての業務を共通事務部経理課で行います。ただし、部局事務に受付窓口的人員を数名配置します。

・教務掛、教職担当→　従来どおり部局事務で行います。

・図書掛→　図書受入、目録作成等の一部は共通事務部総務課で行います。その他の業務は部局図書室で行います。

今後、より詳細に組織体制等について検討の後、構成員の皆さまへご説明させていただく機会をもちたいと考えています。共通事務組織の設置は2013年4月、事務室の移転は2013年7月頃を予定しています。

大学事務の業務は、そのすべてが「知」「人材」を輩出するサポートの役目を担っています。その機能がよりパワーアップできるよう、新たな事務組織の稼働に向け、私も微力ではありますが精一杯がんばっていきたいと思っています。先生方には、特に移行期にはご不便をおかけすることも多々あるかと思いますが、ご理解いただけますと幸いです。

図　書　室　か　ら

図書掛長　奥　野　雅　子

2012年8月20日に京都大学内の図書館/室が持っている図書や雑誌を探せる京都大学蔵書検索KULINE（クライン）が新しくなりました。詳しくは、

・「京都大学蔵書検索KULINEの使い方」
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide_OPAC.pdf

をご覧いただくとして、今回はMyKULINE（マイクライン）について、ご紹介したいと思います。

MyKULINE（マイクライン）は、

・様々な京大内図書館/室で借りている本の返却日確認や読書歴作成
・貸出期間の更新（延長）
・貸出中の図書に予約を入れる
・他大学図書館等への文献複写・現物貸借依頼をオンラインで申し込み
・KULINE検索中に読んでみたいと思った資料をブックマークして気軽にリスト化
・読みたい雑誌の最新号が到着したら教えてくれる
・興味のあるキーワードが含まれる資料が京大に所蔵されたら知らせてくれる

など様々なことがウェブ上で出来る“わたしの図書館”です。

SPS-ID,ECS-IDと同じIDとパスワードでログインします。初めて利用する場合は、IDを［MyKULINE登録システム］で登録、翌日から使えるようになります。

詳細は「京都大学図書館機構オンラインサービス/利用するための手続き」をご覧ください。
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/service/index.php?content_id=18&ml_lang=ja#how

MyKULINE（マイクライン）については、下記のガイドもご利用ください。

・「MyKULINEの使い方(貸出更新・予約編)」
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide_MyKULINE.pdf

・「MyKULINEの使い方(新着アラート・マイフォルダ編)」
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide_MyKULINE_alert.pdf

・「コピーや図書の取り寄せ方」
http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/refguide/docs/RefGuide_ILL.pdf

諸　記　録

◆ 2012年5月～2012年10月のおもな出来事

【2012（平成24）年6月】

30日（土）　大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会（文学部新館第1･2･3講義室）

【2012（平成24）年7月】

7日（土）　大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会（京都大学東京オフィス）
7日（土）　教育学部同窓会東京支部との懇談会
12日（木）　第1回多次元入試研究会「東アジア地域の入試改革の動向から京大入試のあり方について考える」
講師：南部広孝准教授（教育学部本館）
21日（土）　教育実践コラボレーション･センター（教育空間創造ユニット）主催「第7回風と雲の広場 演じる身体」
（京都府南山城村旧野殿童仙房小学校）
28日（土）　教育学部同窓会 役員会･総会･講演会･懇親会

【2012（平成24）年8月】

9日（木）　教育学部オープンキャンパス
18日（土）　附属臨床教育実践研究センター主催第16回リカレント教育講座「心の教育」を考える ー子どもの攻撃性･衝動性･暴力ー（百周年時計台記念館）
18日（土）−20（月）　教育実践コラボレーション･センター主催「2012年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修」
講師：西岡加名恵准教授･石井英真准教授･山名淳准教授･川崎良孝教授･中池竜一助教他（文学部新館第1･2講義室他）
20日（月）　第2回多次元入試研究会「批判的思考力の評価」講師：楠見孝教授（教育学部本館）
26日（日）　附属臨床教育実践研究センター内 こころの支援室主催「陶芸体験」（大覚寺陶房）

【2012（平成24）年9月】

27日（木）　第3回多次元入試研究会「教育評価と大学入試」講師：大塚雄作教授（教育学部本館）

【2012（平成24）年10月】

4日（木）　第4回多次元入試研究会「入試改革と大学入試センター」
講師：学際融合教育研究推進センター惣脇宏教授（教育学部本館）

◆ 平成25年度入試結果

・教育学部

日程等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
前期日程	文系	50				
	理系	10				
第3年次編入学		10	25	25	8	

・教育学研究科

課程等			募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
修士課程	研究者養成コース	教育科学専攻	18				
		臨床教育学専攻	14				
	教育科学専攻（専修コース）		10	47	47	10	
	臨床教育学専攻（第2種）		若干名	2	2	1	
博士後期課程臨床教育学専攻（臨床実践指導者養成コース）			4	3	3	2	
博士後期課程編入学			若干名				

（　　）内の数は外国人留学生で内数

◆ 平成24年度学位授与件数

（H24.10.1現在）

学　位　名　等		授与者数
学士	教育科学科	
修士	教育科学専攻	
	臨床教育学専攻	
博士	課程博士	6
	論文博士	0

◆ 人事異動（H24.5.2～H24.11.1）

[redacted]

◆ 外部資金受入

◎寄附金

名　称　・　寄　附　目　的	寄　附　者	担当者
（名称）「ヒト衝動性の脳セロトニン神経系機構と遺伝子・環境の関与」に対する研究助成 （目的）同上	（財）武田科学振興財団 理事長　横山　巌	野村　理朗
（名称）急速に都市化・近代化するブータン社会における伝統的習俗・試験制度・若者文化－ブータンの若者たち（10代・20代）への聞き取り調査 （目的）同上	（財）三菱財団助成 理事長　畔柳　信雄	西平　直
（名称）教育行政学研究室院生研究への助成 （目的）同上	村田　鈴子	髙見　茂
（名称）「臨床心理士養成大学院におけるスーパーヴィジョンの現状把握とその適正なモデル構築についての多面的検討」に関する研究助成 （目的）同上	（財）日本臨床心理士養成大学院協議会 会長　石川　啓	田中　康裕
（名称）自ら学ぶ意欲を育てて学力を向上させる実践的研究助成のため （目的）同上	（株）ワオ・コーポレーション 代表取締役社長　西澤　昭男	楠見　孝 子安　増生

◎共同研究

名　称　・　目　的	共同研究相手方	担当者
（名称）　建築空間デザインが思考に及ぼす影響の研究 （目的）　同上	（株）竹中工務店 取締役副社長　門川　清行	楠見　孝
（名称）　自ら学ぶ意欲を育てて学力を向上させる実践的研究 （目的）　同上	（株）ワオ･コーポレーション 教育総合研究所　所長　大橋　行輝	楠見　孝 子安　増生

◆ 科学研究費補助金

研究種目	研　究　題　目	研究担当者
新学術領域研究 （研究領域提案型）	周産期からの身体感覚と社会的認知の発達的関連性の解明に基づく障害理解	明和　政子

◆ オープンキャンパス2012開催

平成24年８月9日（木）、10日（金）の両日、「京都大学オープンキャンパス2012」が開催された。

本学部においては、８月9日（木）12時30分から実施し、396名の参加者があった。

当日は、前平泰志学部長の歓迎の挨拶後、ディスカッション「教育学部入試を考える」、各系の説明と質疑応答が行われ、会場は参加者の熱気にあふれた。また、13:00～16:00まで、学生相談員が個別相談にあたり、参加者からは教育学部ではどんな勉強をするのか等の相談が寄せられた。

～ 編 集 後 記 ～

『ニューズレター』第25号をお届けします。「師走選挙」の政権交代で2012年も幕を閉じました。京都大学でも大きな組織改変が始まっています。巻頭言で皆藤章・副研究科長にその全体像と展望を示していただきました。「変わらないでいるためには変わらなければならない」という有名な台詞を確認するため、ヴィスコンティ監督の『山猫』（伊仏合作・1964年）のビデオを観ました。英語のウェブでは字幕の "We must change to remain the same" よりも、英語版台本の "Something had to change for everything to stay as it was" が多くヒットします。人称主語の有無で変革への取り組みに微妙な差違が生まれるような気もしています。（TS）

京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長　角野　善宏　教授（臨床心理実践学講座）
委　員　前平　泰志　教授（教育学研究科長･教育学部長）
委　員　佐藤　卓己　准教授（生涯教育学講座）
委　員　山名　　淳　准教授（教育学講座）
委　員　吉井　　晃　事務長
委　員　谷川嘉奈子　総務掛長
委　員　片山　　正　教務掛長

事務担当
教育学研究科･教育学部総務掛
TEL 075（753）3003